

一物の見方、考え方 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

アジア開発銀行（ADB）が、2012年の東アジア新興国・地域での実質国内総生産（GDP）の伸び率が7.2%になるとの見透しを発表した新しい年を迎えることになったが、欧州の債務危機や先進国の低成長はかならずしも解決されたとはいえず、我が国ではTPP（Trans Pacific Partnership Agreement：環太平洋経済連携協定）への参加、不参加の問題や沖縄米軍基地問題、原発事故への対応の問題など数多くの難題の解決をせまられている前途多難ととるか、前進のための第一歩を踏みだす変革への挑戦の時代への突入をする新しい年を迎えたといえる。

新年を迎えるにあたって、あと戻りする選択はありえず、現実の直面した問題に積極的に取り組み対応するしか道は残されていないのである。

それは、TPPの日本語への翻訳で、以前は「戦略的（Strategic）」や「経済（Economic）」という単語が、いつのまにかなくなってしまった報道によって、受けとる側の「常識」に変化が生じたのである。

結果として、総理府、経済産業省、農林水産省の我が国経済への影響度が著るしく異なるという判断となってしまった。

単純に経済への影響という考えで、常識的に判断すると需要があるか、無いかで産業は発展したり、衰退する。売先が無く需要が無くなれば産業の発展は望めないことは語るまでもないことである。

無資源国日本は、貿易立国しか進むべき道はないのである。そこで、年頭にあって、進むべき道のあやまった判断をさけるために、人間として取るべき道を考えることにした。

それは、「華嚴経」に述べられている「一切唯心造」^{いっさいゆいしんぞう}

著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
釋 禪 禪（野風生）
雅号 樹泉

の心のありようが、善悪や清濁の考え方をつくるということを学び、その要因となる己れの知識や能力、いわゆる判断力を左右する常識等について「常識と暗黙知を考える」で、ものすごい速度で変化する高度情報技術化社会への対応を学び考え、「明歴歴露堂堂」の日本禅宗の曹洞宗始祖、道元禅師（承陽大師）の教えを学び考えて、あらゆる変化、流れに対して如何に対応するかを考えることにする。

その基本は、いうまでもなく謙虚になって物事を考え、変化に対応するためにあらゆる妄想から脱却して進むべき道を考え、常に向上を目ざし精進、努力する姿勢を持つことだと思える。

決して、現実から目をそらし逃げるのではなく、最善の道を進むための努力をおこたらないことである。

2. 一切唯心造を知る

仏教の教え「華嚴経」のなかに、毘盧遮那仏^{びるしゃなぶつ}の教えとして、一瞬の中に永遠を含むという一即一切、一切即一の世界を展開している（大方広仏華嚴経）教えがある。そのなかに「一切唯心造」^{いっさいゆいしんぞう}という教えがある。

人間の社会生活のなかでの「善」も「悪」も、「清」も「濁」も、すべては人間の心がつくりだすという物の見方、考え方である。

その考え方の基本は、自分達の周りを取りまく、あらゆる存在や現象はすべて「心」の働きであり、すべ

